

認知症ケアにおける AOS を活用した介護スタッフと家族のための情報共有 Information-sharing utilizing Action Observation Sheet (AOS) in Dementia Care for Nursing Staff and Family Caregiver

柴田 健一*¹
Kenichi SHIBATA

橋田 浩一*²
Koiti HASIDA

石川 翔吾*³
Shogo ISHIKAWA

*¹ 静岡大学創造科学技術大学院
Graduate School of Science and Technology,
Shizuoka University

*² 東京大学大学院情報理工学系研究科
Graduate School of Information Science and Technology,
The University of Tokyo

*³ 静岡大学大学院情報学研究科
Graduate School of Science and Technology, Shizuoka University

The nursing staff and family caregivers for patients with dementia require an environment in which they can effectively share essential information for services in the location where the patient is receiving care. The standard tool for evaluating the profile of the patient is the Action Observation Sheet (AOS), a survey with 47 questions administered to patient, family members, and nursing staff. With the information provided by the survey we describe a cooperative support system for therapeutic community (nursing staff and family) to understand the situation from differing points of view.

1. はじめに

超高齢社会に突入した日本にとって、加齢が最大の要因である認知症への対応は喫緊の課題となっている。認知症は、一旦正常に発達した認知機能が持続的に低下して、複数の認知障害が日常生活に支障を来すようになった状態である。認知機能の低下は、本人の生活のみでなく、本人と周囲の人々との関係性にも影響を与える。しかし認知症に関する問題の多くは、認知機能障害そのものよりも行動・心理症状(BPSD)に起因する。BPSDは中核症状に環境要因や本人の性格等が影響することで起こるため、周りの人が本人の認知機能の状態を把握し、適切な環境を提供できれば、認知症に関する多くの問題に対応できる。そのためには、認知症の人の認知機能を評価し、現在の状況を認知症の人に関わる家族やスタッフが理解する必要がある。

我々は、認知機能を評価するための検査法である行動観察方式 AOS(Action Observation Sheet)を活用した、認知症の人のコミュニケーションを支援するための情報共有システムを開発している。本発表では、認知症の人の状況理解に向けた、AOSを活用して本人の状況を抽出する情報共有システムについて述べる。

2. 認知症の人の認知機能評価

認知機能を評価する神経心理学的検査には、大きく分けて質問方式と観察方式の2つのタイプがある。質問方式は、本人に対して医療従事者が質問し回答あるいは作業をしてもらう検査法であり、主な例として改訂版長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)、MMSE、脳機能評価バッテリー(BFB)などが挙げられる。質問方式は、家族や介護・医療従事者が本人の日常行動を観察して回答するか本人に直接質問する検査法であり、中でも認知症の重症度を評価する検査の主な例として行動観察方式 AOS(図1)がある。AOSは日常生活動作(ADL)に関する5つの設問と日常生活行動に関する47の設問で構成されて

おり、ADLは5段階、そして日常生活行動は「よくあてはまる」「あてはまる」「すこし傾向がある」「あてはまらない」「分からない」の5つから選んで回答する。日常生活行動に関する項目には、図1のように、それぞれ関連する要素、障害部位、症状がひも付けられている。そのため、どのような行動がどのような認知機能の低下によるものか、そしてどの脳の部位が影響しているのかを、AOSを通して知ることができる。認知症に関する知識が乏しい家族が認知症の人の行動に影響を与えている要因を知ることが、認知症の人の理解につながり、本人とコミュニケーションする際に有用と期待できる。介護スタッフにとっても、認知症の人と接するとき気をつけるべき点を検討する際に有効と考えられる。また AOSは家族や介護スタッフに対して実施するため、本人の認知機能の程度だけでなく周りの人との関係性を知ることができる。例えば家族間である項目の回答に差が生じた場合、どちらかしか観察していない情報が明らかになると同時に、本人との関わり方に違いがあったことを家族間で共有することにつながる。

以上のように、AOSを活用することで認知機能の程度を測るだけでなくさまざまな情報を引き出すことができる。AOSは厚生労働省が「認知症を知り地域をつくるキャンペーン」の一環として実施している「認知症サポーターキャラバン」事業にて用いられている検査法であり、多くの施設で活用されている。しかし AOSより得られた情報の分析、そして家族や介護スタッフへの情報提供・情報共有の方法は各施設・病院によって異なるので、認知症ケアの高度化に向けて認知症の人の状況理解を支援するツールが必要と考えられる。そこで筆者らは AOSを有効に活用している施設の1つである松山市の託老所あんきの手法を分析し、AOSを活用した認知症ケアを支援する情報共有システムの実現を目指している。

表1: AOSの日常生活行動に関する項目の一部

質問内容	関連項目	障害部位	症状
新しいことを覚えられない	境界兆候	海馬	前向性健忘
今言ったことでも、すぐに忘れてしまう	中核症状	側頭葉内側等	近時記憶障害
ごく簡単な言葉でも理解できない	BPSD	左側頭葉	感覚失語

連絡先: 柴田健一, 静岡大学創造科学技術大学院, 静岡県浜松市中区城北 3-5-1, dgs12012@s.inf.shizuoka.ac.jp

